

異文化理解支援事業

2011 年度～2020 年度研究活動実施結果

研究テーマ	頁	掲載資料			
		2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書	2012 自己評価調書	2013 事業実施計画書
プロジェクト研究 体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について	314	2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書	2012 自己評価調書	2013 事業実施計画書
個別研究 異文化交流に向けての言語コミュニケーション研究	321	2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書	2012 自己評価調書	2013 事業実施計画書
個別研究 文学研究を通じた異文化理解	328	2011 上半期 自己評価調書	2011 下半期 自己評価調書	2012 自己評価調書	2013 事業実施計画書
個別研究・プロジェクト研究 討議を軸とした民主主義制度の考察	336	2013 事業実施計画書	2014 事業実施計画書		
プロジェクト研究 体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について (2)	338	2014 事業実施計画書			
プロジェクト研究 言語を介した異文化コミュニケーション	339	2014 事業実施計画書			
コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	341	2015 自己評価書	2016 事業実施計画書	2017 自己評価書	
コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	344	2018 自己評価書	2019 自己評価書	2020 自己評価書	

(説明)

- ・研究活動については、2011 年度～2020 年度の外部評価委員会資料の「自己評価書 (研究活動用)」について、各年度分を掲載しています。
- ・2013 年度、2014 年度、2016 年度の研究活動については、2014 年度及び 2017 年度に機関評価委員会を開催したため自己評価書は作成していません、事業実施計画書を掲載しています。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評 価 者	山崎 ゆき子
-------	--------

【実施結果】

①研究テーマ	プロジェクト研究：体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について
②目的	今後の知識基盤社会構築において重要な役割を果たす継続高等教育について、関連機関の事例研究および本機関での実施アンケートの分析等を行うことによって、多文化共生社会実現に寄与する求められるべき枠組みやあり方について研究し、本機関の生涯学習事業実践のための基盤とする。
③実施内容	本年度は初年度にあたるため、研究の基礎となる文献や資料の収集にあたって いる。 本機関において4月から8月までに実施・終了した講座については、アンケート調査を実施した。詳細な分析は、今後順次行う。
④実施方法	実施期間
	(当初計画) 平成23年度～平成25年度（3年計画）
	(実施結果) 実施中
	他の機関との連携等
(当初計画)	
(実施結果)	
⑤研究成果の実績と活用状況	研究実施中
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 本年度は初年度であるため、基礎文献や資料の収集を中心におこなう。 実施済みアンケートの分析を順次行う。
	(達成状況) 基礎文献や資料は現在収集中である。 アンケート結果は、4月から8月までに実施したものが、現在出そろい始めている。 従って、これらの結果については、今後順次分析作業を行う予定である。

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 基礎文献や資料収集を行っているが、まだ不十分である。 アンケート結果は23年4月から8月までのものが現在出そろい始めたところであるため、詳細な分析については今後行う。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 まだ初年度5か月を経過したところなので、現在、本年度の計画を実施中である。 研究成果を普及するための仕組みは、現在立案中である。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 実際に成果を出した後は国際言語文化アカデミアの事業に活用可能であるが、現段階ではまだ成果を出すには至っていない。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等		

【自由意見欄】

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	山崎 ゆき子
-----	--------

【実施結果】

①研究テーマ	プロジェクト研究：体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について
②目的	今後の知識基盤社会構築において重要な役割を果たす継続高等教育について、日本における生涯学習の基盤となる資料分析、関連機関の実践例および本機関での実施アンケートの分析等を行うことによって、多文化共生社会実現に寄与する求められるべき枠組みやあり方について研究し、本機関の生涯学習事業実践に役立てる。
③実施内容	研究の基礎となる文献や資料の収集をおこなうとともに、その中で最も基本かつ重要な文科省による資料の分析をとおして、我が国の生涯学習政策の枠組みを把握する。つぎに、自治体や民間等による生涯学習関連機関での取り組みを把握することによって、継続高等教育の現状を分析し、多文化共生社会実現への寄与を目的とした継続高等教育の今後の方向性を探る。
④実施方法	実施期間
	(当初計画) 平成23年度～平成25年度（3年計画）
	(実施結果) 本年初年度
	他の機関との連携等
(当初計画) なし	
(実施結果) なし	
⑤研究成果の実績と活用状況	研究実施中
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 23年度は初年度であるため、基礎文献や資料の収集を中心におこなう。 実施済みアンケートの分析を順次行う。
	(達成状況) 基礎文献や資料は入手可能なものから順次、収集を行い、現在も継続中である。 現在の日本における生涯学習政策の経緯と枠組みについて、文科省による資料を中心に内容整理と分析を行った。 本年度実施した講座のアンケート結果については、順次分析作業を行っている。

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. <input checked="" type="checkbox"/> おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 基礎文献や資料の収集を行い、そのうちの最も基本的なものについての内容整理と分析を行った。 アンケート結果は10月以降実施した講座に関しても出そろい始めたところであるため、詳細な分析については今後行う予定だが、自由意見欄に記す理由により、今回のプロジェクト研究とは切り離すことを検討したい。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. <input checked="" type="checkbox"/> おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 初年度として予定していた、基礎文献の収集および研究の基礎となる文科省の資料の整理と分析は実施できた。 アンケート分析は継続中であるが、自由意見欄に記す理由により今後プロジェクト研究とは切り離すことを検討する。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 実際に成果を出した後は国際言語文化アカデミアの事業に活用可能であるが、現段階ではまだ成果を出すには至っていない。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	研究成果については、研究紀要等に発表することを予定している。	

【自由意見欄】

研究を進めていくにつれ、日本の生涯学習の枠組みを決定している文科省の政策など基本的な部分の研究に加え、海外の取り組みについての調査・研究が、今後の継続高等教育の方向性を探るうえで重要であるとの認識を深めている。そのような広い視野・長期的なパースペクティブのもとでの研究が、本機関の在り方を検討するうえにおいても、最終的には有益なものになると思われる。その意味において、受講者のアンケート調査結果分析は、ミクロ的かつ短期的な視点に立ったものであるということができる。

また、アンケートにおいて信頼できる結果を得、それをいかに利用するかについては、質問項目および分析方法ともに、かなりの年数をかけ慎重に検討していく必要があると思われる。したがって、アンケート分析に基づく研究は今回のプロジェクト研究とは別枠で行うのが適切であろう。以上の理由により、研究の内容と方法の見直しを今後検討したい。

自己評価調書（研究活動用）

評価者	山崎 ゆき子
-----	--------

【実施目的】

①研究テーマ	プロジェクト研究：体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について
②目的・目標	今後の知識基盤社会構築において重要な役割を果たす継続高等教育について、多文化共生社会実現に寄与することを目的として、その枠組みやあり方を研究し、本機関の生涯学習事業実践のための基盤とする。

【実施結果】

③実施内容	生涯学習に関する文献や資料の収集を入手可能なものから順次行い、そのうちの基本的なものについて、内容の整理及び分析を実施した。自治体等の生涯学習関連の資料についても収集及び整理を実施中である。	
④実施方法	実施期間	平成23年度～平成25年度（3年計画）本年度2年目
	他の機関との連携等	なし
⑤研究の成果物	現在、研究実施中	
⑥研究成果の活用状況、波及効果等	現在、研究実施中	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦ 計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 <input checked="" type="checkbox"/> C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 生涯学習に関する先行研究や資料の収集を行い、そのうちの基本的なものについての内容整理と分析を行った。またそれと並行して、自治体等の生涯学習関連の資料収集と整理を実施している。しかし、初年度作成計画ではアンケート分析も研究内容に含めていたが、研究の方向性を明確化するため、本研究からは切り離すこととした。	
⑧ 目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 <input checked="" type="checkbox"/> C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 今年度は開所2年目を迎え、担当講座およびその他の運營業務量が大幅に増大し、研究とのバランスが取れない状況となっている。従って、進捗に遅れが出ている状況である。	
⑨ 得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 実際に成果を出した後は国際言語文化アカデミアの事業に活用可能であるが、現段階ではまだ成果を出すには至っていない。	
⑩ 研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	研究成果については、研究紀要等に発表する予定であるが、上述したように、現在、担当講座およびその他の運營業務量が大幅に増大し、研究とのバランスが取れない状況となっている。研究は、本機関の業務を支える重要な柱であるので、質の高い成果を得るためにも、もう少し研究に注力できるよう、全体の業務の見直しが必要なのではないかと思われる。	

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 山崎 ゆき子

計画概要

①テーマ	プロジェクト研究：体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について	
②目的	今後の知識基盤社会構築において重要な役割を果たす継続高等教育について、多文化共生社会実現に寄与することを目的にその枠組みやあり方を研究し、本機関の生涯学習事業実践のための基盤とする。	
③実施内容	引き続き、研究の基盤となる文献や資料の収集と分析をおこない、23年度からの研究成果をまとめる。	
④実施方法	実施期間	平成23年度～平成25年度
	他機関との連携等	特になし
⑤目標 (できるだけ具体的に)	平成23年度からの研究内容をまとめ、その成果を論文等で発表する。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	最終的な研究成果を25年度に論文等で発表する予定である。それにより、成果を本機関の生涯学習事業実践の基盤として活用し、新しいタイプの高等教育機関としての事業内容充実に役立てることが可能となる。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

当初、受講者のアンケート分析も研究内容に含めていたが、枠組みやあり方はマクロ的側面であるのに対し、アンケート調査分析はミクロ的側面である。両者は、方向性が異なるため、今回は、マクロ的な側面に焦点を当て、研究の方向性を明確化することとした。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	江連和章
-----	------

【実施結果】（中間報告）

①研究テーマ	個別研究：異文化交流に向けての言語コミュニケーション研究	
②目的	異なる文化的背景を持つ者どうしの適切な交流の実現に向けて、言語によるコミュニケーションのあり方について、文化・社会との関連性の観点から研究する。	
③実施内容	異文化交流において特に重要なコミュニケーション・ツールとなる言語と、それが使用される文化・社会との関係を研究主題とする。日本における主たる共通言語である日本語と英語をとりあげ、言語構造と用法、文化、社会の観点から比較分析し、それぞれの言語が日本と英語圏の文化・社会を反映する可能性について検証する。異なる文化的背景を持つ者どうしが共通語でコミュニケーションをおこなう際、その共通語の構造や用法に内包される特定文化の特徴が適切なコミュニケーションに支障をきたす可能性を重要視し、効果的な言葉を介した異文化理解と交流のあり方を研究する。	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 平成23年度～平成24年度
		(実施結果) 実施中
	他の機関との連携等	(当初計画) 特になし
		(実施結果) 同上（現状）
⑤研究成果の実績と活用状況	研究実施中	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 上記した実施内容を実践し、研究成果を論文等として発表するとともに本組織事業に活用する。	
	(実施結果) 研究実施中	

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 現状報告：研究実施中。本組織開所となる本年度はこれまで研究以外の業務が優先されることが多く、本研究についてはこれから本格的な実施となる。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等		

【自由意見欄】

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	江連和章
-----	------

【実施結果】（中間報告）

①研究テーマ	個別研究：異文化交流に向けての言語コミュニケーション研究	
②目的	異なる文化的背景を持つ者どうしの適切な交流の実現に向けて、言語によるコミュニケーションのあり方について、文化・社会との関連性の観点から研究する。	
③実施内容	異文化交流において特に重要なコミュニケーション・ツールとなる言語と、それが使用される文化・社会との関係を研究主題とする。日本における主たる共通言語である日本語と英語をとりあげ、言語構造と用法、文化、社会の観点から比較分析し、それぞれの言語が日本と英語圏の文化・社会を反映する可能性について検証する。異なる文化的背景を持つ者どうしが共通語でコミュニケーションをおこなう際、その共通語の構造や用法に内包される特定文化の特徴が適切なコミュニケーションに支障をきたす可能性を重要視し、効果的な言葉を介した異文化理解と交流のあり方を研究する。	
④実施方法	実施期間	(当初計画) 平成23年度～平成24年度
		(実施結果) 実施中
	他の機関との連携等	(当初計画) 特になし
		(実施結果) 同上（現状）
⑤研究成果の実績と活用状況	研究実施中であるが、中途段階での個別成果の報告として『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』（創刊号、2012年3月発行）に論文「言語と文化の関係性に向けて：日英語の機能類型論的考察」を発表した。この成果を24年度講座に活用する予定である。	
⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 上記した実施内容を実践し、研究成果を論文等として発表するとともに本組織事業に活用する。	
	(実施結果) 実施期間の前半となる本年度は、主として母体となる研究材料の整備をおこない、基礎文献や先攻研究の調査、一次言語資料の収集、それらに基づく言語対照分析を実施した。	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
① 計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 上述したように、実施期間の前半となる本年度は、予定していた研究材料の整備を中心におこなった。	
② 目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 基礎文献や先攻研究の調査、一次言語資料の収集、それらに基づく言語対照分析を実施し、当初計画の目標はおおむね達成できた。また、その成果報告として『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』（創刊号、2012年3月発行）に論文「言語と文化の関係性に向けて：日英語の機能類型論的考察」を発表した。	
③ 得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い <input checked="" type="checkbox"/> B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 本年度成果を24年度講座に活用する予定であり、現在準備中である。	
④ 研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	本年度成果は、あくまでも2年計画の本研究を支える個別成果という位置づけとなる。24年度に本研究を継続発展させることにより、言語コミュニケーションと文化・社会との関連性にまで踏み込んだ研究成果を得ることを目指す。その成果については、本年度と同様、論文等として発表するとともに本組織事業に活用する予定である。	

【自由意見欄】

自己評価調書（研究活動用）

評価者	江連 和章
-----	-------

【実施目的】

①研究テーマ	個別研究：異文化交流に向けての言語コミュニケーション研究： 言語と文化・社会との相関性
②目的・目標	異文化交流において特に重要なコミュニケーション・ツールとなる言語と、それが使用される文化・社会との関係を研究主題とする。異なる文化的背景を持つ者どうしが共通語でコミュニケーションをおこなう際、その共通語の構造や用法に内包される特定文化の特徴がコミュニケーションに影響を及ぼす可能性に焦点を当て、言語相対的観点から言葉による異文化理解と交流のあり方を探る。

【実施結果】

③実施内容	調査対象として、日本語と（現代の主要な共通語である）英語を取り上げ、言語構造と用法、文化、社会の観点から比較分析し、それぞれの言語が日本と英語圏の文化・社会を反映する可能性について検証をすすめた。	
④実施方法	実施期間	平成23年度～平成24年度（当初計画）
	他の機関との連携等	特になし
⑤研究の成果物	現在、研究継続中。23年度中途段階での成果報告は、『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』（創刊号、2012年3月発行）に論文「言語と文化の関係性に向けて：日英語の機能類型論的考察」として発表した。	
⑥研究成果の活用状況、波及効果等	上記の（中途段階での）成果を、アカデミアの24年度講座「言葉からみる異文化理解～日英語を中心に～」、「英語で読む「日本語の発想と英語の発想」」他において活用した。	

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦計画の実効性	<p>◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。</p> <p>【評価結果の理由】</p> <p>主として研究時間の確保が難しかったため、上記の実施内容の完遂には至らなかった。現在も調査研究中である。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
⑧目標の達成度	<p>◇当初計画で立てた目標は達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。</p> <p>【評価結果の理由】</p> <p>調査研究中のため、最終的な研究成果を出すには至っていない。成果を得た後には、『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』他で発表する予定である。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
⑨得られた効果	<p>◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。</p> <p>◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。</p> <p>【評価結果の理由】</p> <p>上記で報告したように、中途段階での研究成果はアカデミアの24年度講座にて活用し、講座内容の向上及び受講者の理解と満足を高めることに役立った。最終的な研究成果についても、アカデミアの事業に活用する予定である。</p>	<p>A. 十分高い</p> <p>B. 高い</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> C. やや低い</p> <p>D. 低い</p>
⑩研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	<p>現在研究継続中のため未定。本研究の実施期間を平成25年度まで延長し、最終的な研究成果を得た上で検討したい。</p>	

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 江連 和章

計画概要

①テーマ	個別研究：異文化交流に向けての言語コミュニケーション研究：言語と文化・社会との相関性	
②目的	異文化交流において特に重要なコミュニケーション・ツールとなる言語と、それが使用される文化・社会との関係を研究主題とする。異なる文化的背景を持つ者どうしが共通語でコミュニケーションをおこなう際、その共通語の構造や用法に内包される特定文化の特徴がコミュニケーションに影響を及ぼす可能性に焦点を当て、言語相対的観点から言葉による異文化理解と交流のあり方を探る。	
③実施内容	日本における主たる共通言語である日本語と英語をとりあげ、言語構造と用法、文化、社会の観点から比較分析し、それぞれの言語が日本と英語圏の文化・社会を反映する可能性について検証する。23年度～24年度に引き続き、研究基盤となる文献や資料の収集と分析をおこない、研究成果をまとめる。	
④実施方法	実施期間	平成25年度（実施を一年度延長）
	他機関との連携等	他の外部研究者との共同研究として研究規模を拡大することを検討している。
⑤目標 (できるだけ具体的に)	上記した実施内容を実践し、研究成果を論文等として発表する。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果を本組織の紀要論文集他で発表し、外部研究者との意見交換や共同研究も含め更なる研究発展を図る。 ・研究成果を、本組織事業の講座や企画に活用する。 	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

当所計画としては平成23年度～平成24年度の2年間の研究であるが、研究の深化拡大とその実施状況の点から実施期間を延長する。

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評 価 者	新谷雅樹
-------	------

【実施結果】（中間報告）

① 研究テーマ	個別研究：文学研究を通じた異文化理解	
② 目的	江戸時代における日本と中国の関係にかかわる歴史的文学資料の研究をおこない、異文化理解と交流のあり方、特に日本と中国の間のそれについて、歴史的観点から考察し理解を深める。	
③ 実施内容	<p>明末清初の性霊詩派の影響を受けた山本北山とその一門の漢詩の調査、研究。特に箱根芦の湯・東光庵に残る北山門下の詩碑の現地調査と、それに関する資料収集を進めた。私見によれば、漢詩の日本化の例として「温泉詩」の流行があげられるが、それは中国古来の山水詩の一変種であり、江戸人が好んだ行楽行旅と無関係ではない。このことを北山門下の詩碑の研究を通して実証する。</p> <p>また魁星（文運をつかさどる神）に対する一門（谷文晁一門も含む）の信仰も調査中である。『七湯の枝折』などの文献によれば、喜多武清などの文晁一門の魁星図がこの陰碑に刻されているというが、現調査の結果、そういう形跡はない。写本『魁星考』について見れば、武清らの絵はここに収載されているのに、である。この謎の解明を急ぎたい。</p>	
④ 実施方法	実施期間	(当初計画) 平成23年度～平成24年度
		(実施結果) 実施中
	他の機関との連携等	(当初計画) 特になし
		(実施結果) 同上（現状）
⑤ 研究成果の実績と活用状況	研究実施中	
⑥ 当初目標と達成状況	(当初目標)	上記した実施内容を実践し、研究成果を論文等として発表するとともに本組織事業に活用する。
	(実施結果)	研究実施中

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 現状報告：研究実施中。本組織開所となる本年度はこれまで研究以外の業務が優先されることが多く、本研究についてはこれから本格的な実施となる。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等		

【自由意見欄】

自己評価調書（研究活動用）（1/2）

評価者	新谷雅樹
-----	------

【実施結果】（中間報告）

① 研究テーマ	個別研究：文学研究を通じた異文化理解	
② 目的	江戸時代における日本と中国の関係にかかわる歴史的文学資料の研究をおこない、異文化理解と交流のあり方、特に日本と中国の間のそれについて、歴史的観点から考察し理解を深める。	
③ 実施内容	<p>明末清初の性霊詩派の影響を受けた山本北山とその一門の漢詩の調査、研究。特に箱根芦の湯・東光庵に残る北山門下の詩碑の現地調査と、それに関する資料を収集した。私見によれば、漢詩の日本化の例として「温泉詩」の流行があげられるが、それは中国古来の山水詩の一変種であり、江戸人が好んだ行楽行旅と無関係ではない。このことを北山門下の詩碑の研究を通して実証する。</p> <p>また魁星（文運をつかさどる神）に対する一門（谷文晁一門も含む）の信仰も調査中である。『七湯の枝折』などの文献によれば、喜多武清などの文晁一門の魁星図がこの陰碑に刻されているというが、現調査の結果、そういう形跡はない。写本『魁星考』について見れば、武清らの絵はここに収載されているのに、である。この謎の解明を急ぎたい。</p> <p>しかし、当初は上記の計画だったが、北山門下の佐羽淡斎の研究（とくに「題金沢総宜楼」の詩碑に関するもの）に今回は終始した。それというのも、神奈川県立図書館に金沢八景の東屋＝総宜楼（江戸・明治では随一の料亭旅館。昭和三十年廃業）の扁額「四時総宜之楼」とその石碑図が所蔵されているのを偶然、発見したからである。これで江戸の文人たちと東屋＝総宜楼の関係が分かり、金沢八景がいかにか江戸の文化人に愛されたか、最初にこれに関する研究を行った。淡斎は東光庵詩碑の金主であり、総宜楼詩碑の金主でもあるから、今回の論文は淡斎という文化的パトロンが多面性について考察した。</p> <p>また中国の瀟湘八景と金沢八景の関連性についても言及した。</p>	
④ 実施方法	実施期間	(当初計画) 平成23年度～平成24年度
		(実施結果) 実施中
	他の機関との連携等	(当初計画) なし
		(実施結果) 同上(現状)
⑤ 研究成果の実績と活用状況	<p>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』（創刊号、2012年3月発行）に研究ノート「ある江戸人の異文化理解（一）——佐羽淡斎の総宜楼の詩碑をめぐって」を発表した。</p> <p>六月に『藝文研究』と『太平詩文』に論文を発表する予定。両雑誌は六月頃、刊行の予定である。</p> <p>また八月に、教員研修にパワーポイントを用いて、金沢八景について論ずる予定である。とくに金沢八景詩歌（東臯心越の漢詩・無生居士の和歌）について扱う。</p>	

⑥当初目標と達成状況	(当初目標) 上記した実施内容を実践し、研究成果を論文等として発表するとともに本組織事業に活用する。
	(実施結果) 研究実施中。『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』に発表した研究ノートが連載で、まだ未完なので、この研究の継続を進める。

事後評価自己評価調書（研究活動用） (2/2)

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
①計画の実効性	◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。	A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 現状報告：実施内容で報告したように、当初計画はおおむね達成されている。	
②目標の達成度	◇当初計画で立てた目標は達成できたか。 ◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。	A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 現状報告：研究ノートを『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』（平成24年3月発行）論文を『藝文研究』に投稿、六月発行予定。八月の教員研修はまだ実施されていないが、その準備を着々と進めている。	
③得られた効果	◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。 ◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。	A. 十分高い <input checked="" type="checkbox"/> B. 高い C. やや低い D. 低い
	【評価結果の理由】 『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』を読んだ『太平詩文』の編集者から寄稿を依頼された。これで県内はもちろん県外にも読者を得ることになる。また、上述の『藝文研究』は学術性の高い雑誌なので、発行後に何らかの反響があると予想される。	
④研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』での発表は連載の形を取っているため、まずはこの連載を終わらせ、『東光庵詩碑』について論文を書き、学術誌に発表し、江戸の漢詩人・木百年の卒年の定説を改めたい。（大窪詩仏の書翰に百年の卒年を記したものを発見）。これを発表すれば江戸の漢文学史を書き換えることになる。	

【自由意見欄】

このペースで年二～三本の論文を発表したい。

自己評価調書（研究活動用）

評価者	新谷 雅樹
-----	-------

【実施目的】

①研究テーマ	個別研究：文学研究を通じた異文化理解に向けての研究： ある江戸人の異文化理解 佐羽淡斎の詩碑をめぐって
②目的・目標	江戸時代の桐生の絹商人であり、詩人でもあった佐羽淡斎の「詩碑」から、彼の中国理解のありようをさぐる。 また群馬の絹商人がどのようにして漢詩人として大成していったか、一方、中央文人の文化的パトロンとしてどのように活躍したか、を明らかにする。 中国の白話小説『通俗古今奇観』を翻訳したのが、他にもない淡斎である。鎖国下の江戸時代に、彼が唐話（＝中国語）をどのように勉強したか（誰に習い、教材は何か）について調査する。ネイティブについて学ぶ機会も皆無で、唐話辞書も高価だった江戸時代における外国語学習は困難を極めたはずだが、よく忙中に閑を見つけて翻訳までしてしまう淡斎について、現代の我々の参考にするべく調査する。

【実施結果】

③実施内容	淡斎の詩碑は金沢八景に建てられたので、それに関する資料を風潰しに探した。その結果、貴重な資料を数多く発掘することができた。 金沢八景は明の渡来僧・東臯心越禅師によって明確に発見されたものだったので、以後、金沢八景は日中両文化（絵画や詩歌）の共演によって名声を博し、日本十大風景の一つに数えられるまでになった。淡斎はこのことを強く意識し、大枚を投じて金沢八景に自詩の石碑を建て、自分の詩業を後世に残そうとした。そればかりではない、一介の商人にすぎない淡斎が自分の詩碑を百基まで建てようとしたのである。これは中国にも前例を見ないものだが、おそらく清の文人皇帝・乾隆帝をお手本としたのではないかと思われる。 以上のことを、アカデミア教員研修で講演し、また研究ノート・論文にまとめた。	
④実施方法	実施期間	平成23年度～平成24年度
	他の機関との連携等	群馬県立女子大学、慶應義塾大学

<p>⑤研究の成果物</p>	<p>教員のための異文化理解講座Ⅰ「佐波淡齋の金沢八景総宜楼の詩碑をめぐって」(2012年8月1日)</p> <p>論文「畢竟、これ行旅——桐生の詩人・佐羽淡齋の「総宜楼」詩碑をめぐって」『藝文研究』第百二号(2012年6月)</p> <p>研究ノート「ある江戸人の異文化理解(二)——佐羽淡齋(一七七二～一八二五)の総宜楼の詩碑をめぐって」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第二号(2013年3月)</p>
<p>⑥研究成果の活用状況、波及効果等</p>	<p>教員のための異文化理解講座で、地元の金沢八景を取り上げたことは有意義であった。とりわけ金沢八景が日中両文化の合作のようなものだという事実に驚いたようである。どの文化(風景)も単独では成立しない、という好個の例を示して、異文化理解の一つの方法論を説いた。</p> <p>また私の論文は、群馬県立女子大学の井上一之教授の目にとまり、共同研究が行われることになった。共同研究が深まれば、江戸漢詩の世界に新生面を開くことになるだろう。</p>

【自己評価結果】

評価項目	評価の視点	評価結果
⑦計画の実効性	<p>◇当初計画の内容、実施方法を実践できたか。</p> <p>【評価結果の理由】 世に埋もれた大窪詩仏の「四時総宜之楼」の扁額や、佐羽淡斎の詩碑「題金沢総宜楼」を講演・研究ノート・論文を通じて発表し、広く知らしむることが出来た。加えて『金沢八景案内子』の翻字を発表することによって、東阜心越禅師の詩八詠・京極無生居士の歌八首の和漢朗詠のありかたを示すことができた。この二人の漢詩・和歌の名声がなければ、金沢八景は歌川広重などの風景が描かれることはなかっただろう。</p>	<p>A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成</p>
⑧目標の達成度	<p>◇当初計画で立てた目標は達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、普及し得るだけの十分な実績を得られたか。報告書としてまとめたり、ホームページに掲載したりして、広く普及するための仕組みをつくっているか。</p> <p>【評価結果の理由】 教員のための異文化理解講座で、現職教員の生の反応を知ることができた。好評を得られた。 論文は認められ、群馬県立女子大学の井上一之教授との共同研究の道が開かれた。また慶應義塾大学の『藝文研究』から再度、執筆依頼があった。 『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』はホームページに既に掲載され、『藝文研究』もゆくゆくデジタル化されて衆目に触れることになる予定である。</p>	<p>A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成</p>
⑨得られた効果	<p>◇研究成果は、活用されているか。研究成果を実際に活用した者から、満足な評価を得られているか。</p> <p>◇国際言語文化アカデミアが実施する研修講座への活用は可能か。</p> <p>【評価結果の理由】 群馬県立女子大学の井上教授から佐波淡斎に関する講演の依頼があった（講演日は未定）。 研究成果はすでにアカデミア教員研修で活用されている。金沢八景の由緒正しさを知った教員たちがこれを機会に神奈川の郷土史に愛着を持つようになれば申し分ない。</p>	<p>A. 十分高い <input checked="" type="checkbox"/> B. 高い C. やや低い D. 低い</p>
⑩研究成果のさらなる活用、普及に向けた改善方策等	<p>商人・詩人・書家・文化的パトロン・慈善家であった佐波淡斎は多面的な人物で、その全容を明らかにするには、さらに時間が必要であるが、私の研究をきっかけに佐波淡斎再評価の気運を巻き起こしたい。 群馬県立女子大学の協力も仰いで、淡斎の日記、札記、草稿などを発掘しようと考えている。 教員に対する研修においては、画像の提示（パワーポイント）の工夫をしたいと思う。</p>	

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 新谷 雅樹

計画概要

①テーマ	個別研究：文学研究を通じた異文化理解に向けての研究： ある江戸人の異文化理解 佐羽淡斎の詩碑をめぐって	
②目的	24年度より継続して、江戸の絹商人であり、詩人でもあった佐羽淡斎の「詩碑」から、彼の中国理解のありようをさぐる。 また最近知りえたことだが、彼が翻訳した白話小説『通俗今古奇観』を通して、淡斎の中国語学習のありようをさぐる。	
③実施内容	引き続き、研究の基盤となる文献や資料の収集と分析をおこなうと共に、研究成果としてまとめる。	
④実施方法	実施期間	平成25年度（実施を一年度延長）
	他機関との連携等	群馬県立女子大学（井上一之教授他）
⑤目標 （できるだけ具体的に）	群馬の絹商人がどのようにして漢詩人となったか。どのように文化的なパトロンとして活躍したかを明らかにする。（例えば、木百年にどのような文化的援助の手を差し伸べたかについて調査する。） 同時に、多忙な淡斎がどのようにして中国語を習得し、明代の口語小説を翻訳できるまでになったか、使用したテキストは何か、教師は誰かについて調べ、鎖国時代なりの語学修得法を調査研究する。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	江戸時代の異文化理解のありかた（とくに文化的パトロンとしてのありかた）を明らかにすることにより、現在の異文化理解のありかたの一助とする。この成果を「教員のための異文化理解講座」に活用する（パワーポイントで多くの画像を紹介する予定）。また『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第二号に研究ノート「ある江戸人の異文化理解（二）——佐羽淡斎の総宜楼の詩碑をめぐって——」を発表する予定である。加えて、慶応義塾大学発行の『藝文研究』に、佐羽淡斎と交流があった信濃の詩人・木百年に関する論文を発表する予定である。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

中国の白話小説『通俗今古奇観』を淡斎が翻訳していたことを最近の調査で知りえた。中国語学習の困難な時代に、淡斎がどのように中国語を学んだかは興味のある問題である。これは現代の中国語学習者に対しても示唆的な問題となる。

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 岡田健太郎

計画概要

①テーマ	個別研究：討議を軸とした民主主義制度の考察	
②目的	代議制デモクラシーを軸とした、これまでのデモクラシーへの不満が高まっている。本研究では、代議制デモクラシーを軸としつつも、それを補強する二回路のデモクラシー制度の構築を目指す、新しいデモクラシー論である討議デモクラシー論についての考察と研究を行う。	
③実施内容	まず、①討議デモクラシー理論とその実践について考察を行い、そのうえで、②特にカナダを中心とする事例について比較分析を行う。さらに、神奈川県や日本において、このような試み、実践が活用できるかどうか、検討を重ねることとする。	
④実施方法	実施期間	平成25年度～平成27年度（平成25年度から新規実施）
	他機関との連携等	特になし
⑤目標 (できるだけ具体的に)	討議デモクラシー理論を政治学、社会学双方の見地から理論的に考察する。また、討議デモクラシーの実践例としてよく取り上げられるカナダの諸事例の検討を行い、あらたな含意を見出す。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	アカデミア紀要に論文を寄稿するほか、学会報告の実施、学会雑誌への投稿を考えている。また、本研究の成果が、アカデミアにおける講座をはじめとした諸事業に生かされることは言うまでもない。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

平成25年度からの新規実施の個別研究である。

これまで研究担当者である岡田は、このテーマにそって研究活動をおこなってきており、本研究もその延長線上にある。特に本研究において、神奈川県における外国籍県民会議等の制度を、討議デモクラシー論の見地から比較検討することを目指している。

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 岡田健太郎

計画概要

①テーマ	プロジェクト研究：討議を軸とした民主主義制度の考察	
②目的	代議制デモクラシーを軸とした、これまでのデモクラシーへの不満が高まっている。本研究では、代議制デモクラシーを軸としつつも、それを補強する二回路のデモクラシー制度の構築を目指す、新しいデモクラシー論である討議デモクラシー論についての考察と研究を行う。	
③実施内容	平成25年度においては、特にカナダにおける討議デモクラシーの実践について資料収集を行い、あわせて当事者へのインタビューを行うことができた。平成26年度には、これらの資料を用いて研究報告や論文執筆を行うほか、日本における討議デモクラシーの実践例にも目を配りつつ研究活動を進めていく。	
④実施方法	実施期間	平成25～27年度（三か年計画の二年目に該当）
	他機関との連携等	なし
⑤目標 (できるだけ具体的に)	討議デモクラシー理論を政治学、社会学双方の見地から理論的に考察する。また、討議デモクラシーの実践例としてよく取り上げられるカナダの諸事例の検討を行い、あらたな含意を見出す。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	アカデミア紀要に論文を寄稿するほか、学会報告の実施、学会雑誌への投稿を行う。また、本研究の成果は、アカデミアにおける講座をはじめとした諸事業に生かしていくこととしている。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

平成25年度より三年計画で科学研究費補助金若手研究（B）に採択されたことにより、本研究活動をより円滑に進めることができるようになった。研究規模の拡大も視野に入れ、26年度より本研究の位置づけを個別研究からプロジェクト研究へと変更する。グローバルな視座で研究を進めつつも、日本や神奈川県の実例にも注目しながら研究活動を進めていきたい。特に本プロジェクト研究においては、神奈川県における外国籍県民会議等の制度を、討議デモクラシー論の見地から比較検討することを目指しており、本年度はこの点に特に力を入れたい。

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 山崎 ゆき子

計画概要

①テーマ	プロジェクト研究：体系的な継続高等教育の枠組みとそのあり方について（2）	
②目的	今後の知識基盤社会構築において重要な役割を果たす高等教育における継続教育について、多文化共生社会実現に寄与することを目的にその枠組みやあり方を研究し、本機関の生涯学習事業実践のための基盤とする。	
③実施内容	平成25年度に、本研究の最も基盤となるユネスコの生涯学習概念について再検討を行う研究を実施し、成果をまとめた。今後2年間で、その研究成果を踏まえ、次段階の研究の基礎となる文献や資料の収集と分析をおこなう。	
④実施方法	実施期間	平成26～27年度
	他機関との連携等	なし
⑤目標 (できるだけ具体的に)	27年度終了後に成果をまとめ、論文等で発表する。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	成果を本機関の生涯学習事業実践の基盤として活用し、新しいタイプの高等教育機関としての事業内容充実に役立てることが可能となる。	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

研究テーマが極めて大きく、多様な観点からの研究が必要であるため、段階を分けて継続的に研究を実施することにした。23～25年度は、最も基盤となる研究として、ユネスコの生涯学習概念についての研究を行なった。26～27年度は、その成果を踏まえて研究を進める予定である。

事業実施計画書（研究活動用）

部会名 生涯学習支援事業

担当者 江連 和章（代表）

計画概要

①テーマ	プロジェクト研究：言語を介した異文化コミュニケーション	
②目的	様々なコミュニケーションの方法の中でも、最も重要なコミュニケーションツールである言語を介した異文化コミュニケーションのあり方を研究主題として、主として言語と文化・社会との関係性と、異文化コミュニケーションにおける言語の役割という二つの観点から理論的及び実践的な調査研究を行う。	
③実施内容	具体的研究対象として、（日本における主たる共通言語である）日本語と英語による異なる文化背景を持つ者同士のコミュニケーションを取り扱う。言語と文化・社会との関係性という点では、コミュニケーションに用いる共通語の構造や用法そのものに特定文化の特徴が内包されているとする言語相対性に焦点を当てた調査検証を行う。また、異文化コミュニケーションにおける言語の役割という点からは、仮に共通語そのものに特定文化の特徴が反映される場合、それは実際のコミュニケーションにどのような影響を及ぼすのか、また、異文化コミュニケーションのための共通語とはどのようなものであるべきなのか、それらを踏まえた適切な言語コミュニケーションのあり方とは何か等について調査研究を行う。	
④実施方法	実施期間	平成26年度～平成27年度
	他機関との連携等	未定
⑤目標 （できるだけ具体的に）	理論研究にとどまらず、実践面での活用につながる研究及び成果を目指す。	
⑥研究成果の活用方法、波及効果等	<ul style="list-style-type: none"> ・研究成果を論文等として発表し、外部研究者との意見交換や共同研究も含め更なる研究発展を図る。 ・研究成果を、本組織の異文化コミュニケーション関連の講座カリキュラムの企画や運営に活用する。 	

上記計画策定にあたって創意工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

平成25年度までは、主として言語と文化・社会との相関性に焦点を当てた個別研究であったが、調査研究をすすめるにつれ研究視野の拡大が不可欠となり、複数の担当者によるプロジェクト研究として新規開設した。

自己評価書（研究活動用）

講座群 コミュニケーション支援ボランティア養成講座

評価者 江連 和章

実績概要

研究テーマ	コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	
①目的	コミュニケーション支援ボランティア養成のための語学教材の研究開発を行う。	
②目標	<p>成果物：コミュニケーション支援ボランティア養成のための英語教材</p> <p>成果物の普及：本所講座にて教材として使用する他、適宜アカデミアホームページ等にて公開する。</p> <p>講座への反映：コミュニケーション支援ボランティア養成の英語講座（初歩編、基本編、発展編）</p>	
③実施内容	<p>実施期間：平成27～29年度</p> <p>推進体制：主たる研究構成員として江連和章と飯田深雪が中心となり、ネイティブを含む外部研究者との連携を図りながら教材研究開発を推進する。</p> <p>また、英語以外の外国語によるコミュニケーション支援ボランティア養成との比較検討や調整の有用性と必要性から、山崎ゆき子（フランス語）、中島ベルナルド（スペイン語）、新谷雅樹（中国語）、ポルトガル語担当講師もカリキュラム検討会議等にて適宜参加する。</p> <p>進め方：27年度より実施するコミュニケーション支援ボランティア養成の英語講座にて調査、検証を行いながら、初歩編、基本編、発展編の順で、教材開発を進めていく。</p> <p>27年度：初歩編と基本編の原案作成 →初歩編の試案を作成、現在原案化へ向けて調整中。基本編については、試案作成に向けて素材等を整理中。</p> <p>28年度：初歩編と基本編の改訂版作成、発展編の原案作成</p> <p>29年度：初歩編と基本編の完成版作成、発展編の改訂版、完成版の作成</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（アカデミア紀要・その他）・出版・HP掲載
	外部資金	申請（平成〇年度分）・不要
	他機関との連携等	適宜外部研究機関、研究者と連携を図る。 →(27年度)無し

成果物等

⑤成果等	成果物及びその普及	<p>27年度：</p> <p>学会発表 題目「Designing English Courses for Volunteers」 第41回全国語学教育学会年次国際大会、平成27年11月22日</p> <p>学会発表報告 題目「英語ボランティア養成講座の動機づけに関わる調査研究」 『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第5号、平成28年3月</p>
	講座への反映	27年度：英語講座（初歩編、基本編）にて試用

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥目標達成度	◇当初計画で立てた目標を達成できたか。 ◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。	A. 達成 B. おおむね達成 <input checked="" type="checkbox"/> C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇新規実施の英語初歩編・基本編の講座計画・調整と同時並行的に教材の開発研究を進めたこと、ネイティブ教員との連携が十分ではなかったこと等により、進捗が遅れが出ている状況である。 ◇研究成果の普及という点では、研究の進捗状況に合わせて適切に行えたと判断する。	
⑦成果の有効性	◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。 ◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。	A. 達成 <input checked="" type="checkbox"/> B. おおむね達成 C. やや不十分 D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇英語初歩編6講座（クラス）と基本編2講座（クラス）にて活用した。 ◇受講者による評価については特に調査していないが、コミュニケーション支援に特化した教材の使用について良しとする意見を複数得ている。	
⑧今後の改善方策	上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等 平成28年度は新規に発展編を実施するため、本年度と同様に講座計画・調整と同時並行的に教材開発及び調整を進めることになる。時間調整を十分に行い、ネイティブ教員とも密に連携を図りながら進捗状況の遅れを改善する。	

事業実施計画書（研究活動用）

講座群 コミュニケーション支援ボランティア養成講座

主任者 江連 和章

計画概要

研究テーマ	コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	
①目的	コミュニケーション支援ボランティア養成のための語学教材の研究開発を行う。	
②目標	<p>成果物：コミュニケーション支援ボランティア養成のための英語教材</p> <p>成果物の普及：本所講座にて教材として使用する他、適宜アカデミアホームページ等にて公開する。</p> <p>講座への反映：外国語を使ってボランティアを目指すための英語講座（初歩編、基本編、発展編）</p>	
③実施内容	<p>実施期間：平成27～29年度</p> <p>推進体制：</p> <p>主たる研究構成員として、江連和章教授と飯田深雪准教授が中心となり英語の教材開発研究を行い、Peter Parise講師他、アカデミア英語ネイティブ教員が教材案の校閲等を行う。また、英語以外の外国語によるコミュニケーション支援ボランティア養成との比較検討や調整の有用性と必要性から、山崎ゆき子教授（フランス語）、中島ベルナルド教授（スペイン語）、新谷雅樹教授（中国語）もカリキュラム検討会議等にて適宜参加する。適宜外部研究者との連携を図りながら教材研究開発を推進する。</p> <p>進め方：</p> <p>既に27年度より実施している、外国語を使ってボランティアを目指すための英語講座内にて調査、検証を行いながら、初歩編、基本編、発展編の順で、教材開発を進めていく。</p> <p>27年度：初歩編の試案を作成、年度末までには基本編の一部について試案を作成予定</p> <p>28年度：初歩編と基本編の原案、改訂版の作成、発展編の原案作成</p> <p>29年度：初歩編と基本編の完成版作成、発展編の改訂版、完成版の作成</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（アカデミア紀要・その他）・出版・HP掲載
	外部資金	申請（平成〇年度分）・不要
	他機関との連携等	適宜外部研究機関、研究者と連携を図る。

上記計画策定にあたって工夫した点、これまでの手法等を見直した点など

コミュニケーション支援ボランティアを養成する講座を実施する上で、この特定目的に沿った定番となるような良質な教材の開発が不可欠であるため、本研究を計画した。

自己評価書（研究活動用）

講座群 コミュニケーション支援ボランティア養成講座

評価者 山崎 ゆき子

実績概要

研究テーマ	コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	
①目的	コミュニケーション支援ボランティア養成のための語学教材の研究開発を行う。	
②目標	<p>成果物：コミュニケーション支援ボランティア養成のための英語教材 成果物の普及：本所講座にて教材として使用する他、適宜アカデミアホームページ等にて公開する。</p> <p>講座への反映：外国語を使ってボランティアを目指すための英語講座（初歩編、基本編、発展編）</p>	
③実施内容	<p>実施期間：平成27～29年度</p> <p>推進体制：主たる研究構成員として江連和章（平成29年度から寺澤君江に交代）と飯田深雪が中心となり、ネイティブを含む外部研究者との連携を図りながら教材研究開発を推進する。また、英語以外の外国語によるコミュニケーション支援ボランティア養成との比較検討や調整の有用性と必要性から、山崎ゆき子（フランス語）、中島ベルナルド（スペイン語）、新谷雅樹（中国語）もカリキュラム検討会議等にて適宜参加する。</p> <p>進め方：</p> <p><平成28年度計画></p> <p>27年度：初歩編の試案を作成、年度末までには基本編の一部について試案を作成予定</p> <p>28年度：初歩編と基本編の原案、改訂版の作成、発展編の原案作成</p> <p>29年度：初歩編と基本編の完成版作成、発展編の改訂版、完成版の作成</p> <p>平成28年度では、初歩編、基本編、発展編の順で概略上記内容を計画したが、現状における初歩編レベルの学習需要の高さを鑑み、以下のように計画を明確化し、実施した。</p> <p><平成29年度></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 初歩編レベルの教材を、初歩レベル学習者のためのコミュニケーション支援の入り口となる自習用教材として明確化 2. 当該自習用教材の開発を優先させ、時間と労力を十分にかけて初版を作成 	
施 方	成果発表	<input type="checkbox"/> 学会等発表・論文発表（ <input type="checkbox"/> アカデミア紀要・その他）・出版・ <input type="checkbox"/> HP掲載
	外部資金	申請（平成〇年度分）・ <input type="checkbox"/> 不要

	他機関との連携等	なし
--	----------	----

成果物等

⑤ 成果等	成果物及びその普及	<p>27年度：</p> <p>学会発表 題目「Designing English Courses for Volunteers」 第41回全国語学教育学会年次国際大会、平成27年11月22日</p> <p>学会発表報告 題目「英語ボランティア養成講座の動機づけに関わる調査研究」 『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第5号、平成28年3月</p> <p>29年度 初歩編レベル自習用WEB教材完成。アカデミアのホームページに平成30年3月下旬から掲載。</p>
	講座への反映	<p>27年度：英語講座（初歩編、基本編）にて試用</p> <p>29年度：英語講座（基本編、発展編、テキスト・リーディング）受講者に試用</p>

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥ 目標達成度	<p>◇当初計画で立てた目標を達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇対象を明確化したことにより、時間と労力をかけて講座目的に適した有用性の高い教材を完成させることができた。</p> <p>◇ホームページ公開により、英語講座受講者の利用とともに、講座を受講できない方々の利用も可能となり、普及が図れたと考える。</p>	
⑦ 成果の有効性	<p>◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。</p> <p>◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇英語基本編1講座（クラス）と発展編1講座（クラス）、テキスト・リーディング講座（1クラス）にて試用し、今後も受講者に活用してもらう予定である。</p> <p>◇受講者によるモニタリング調査において、すべての項目に関して、平均90%の受講者から「役に立つ」という評価を得ている。</p>	
⑧ 今後の改善方策	<p>上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等</p> <p>平成30年度は音声を入れた改訂版を作成し、一層使いやすいものとする。</p> <p>なお、初歩編作成の経験を活かし、平成30年度から3年計画で基本編レベルの教材を開発する予定である。</p>	

自己評価書（研究活動用）

講座群 コミュニケーション支援ボランティア養成講座

評価者 山崎 ゆき子

実績概要

研究テーマ	コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	
①目的	コミュニケーション支援ボランティア養成のための語学教材の研究開発を行う。	
②目標	<p>成果物：コミュニケーション支援ボランティア養成のための自習用英語WEB教材</p> <p>成果物の普及：本所ホームページにて公開し、県民の英語によるコミュニケーション支援活動に資する。</p>	
③実施内容	<p>実施期間：平成30～32年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・30年度は、29年度に作成した英語初歩編レベル向け自習用WEB教材に、音声を追加するとともに、使用者の反応を参考に、より使いやすい内容に改良した改訂版を作成する。 ・上記作業と並行し、初歩編レベル向け教材作成でのノウハウと経験を生かし、基本編レベル向け自習用WEB教材の研究開発を行う。 <p><研究実施体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成の主たる研究構成員として、英語担当教員である飯田深雪と寺澤君江が中心となり英語の教材開発研究を行う。さらに、英語以外の外国語によるコミュニケーション支援ボランティア養成との比較検討や調整の有用性と必要性から、山崎ゆき子（フランス語）、中島ベルナルド（スペイン語）、新谷雅樹（中国語）も作成検討会議等に参加し、異文化理解支援事業担当教員全員で教材全体の作成を行う。英語部分校閲及び音声録音については、英語ネイティブ教員の協力を得る。また、必要な場合には、適宜外部研究機関、研究者と連携を図る。 <p><計画></p> <p>30年度：初歩編に音声を組み込んだ改訂版の作成 基本編の構成内容の検討と素案の作成</p> <p>31年度：基本編の原案作成</p> <p>32年度：基本編の完成版作成</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（ アカデミア紀要 ・その他）・出版・ HP掲載
	外部資金	申請（平成〇年度分）・ 不要
	他機関との連携等	なし

成果物等

⑤ 成果等	成果物及びその普及	<p>30年度：・初歩編に音声を組み込んだ改訂版完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当所ホームページに平成30年10月から掲載 ・研究紀要への投稿 <p>題目「外国語を使ってボランティアを目指すための語学講座 英語（初歩編）～自習用WEB教材の作成～」</p> <p>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第8号、平成31年3月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本編の素案および第1課の試案作成
	講座への反映	英語講座（初歩編、基本編）受講者に対し、講座での学習内容の定着を目的とした復習教材としての利用を提案。

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥ 目標達成度	<p>◇当初計画で立てた目標を達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇初歩編に関しては、内容を一部変更するとともに音声と動画を組み込んだことにより、神奈川県に適したより有用性の高い教材を完成させることができた。</p> <p>◇ホームページ公開および当所研究紀要に報告を発表したことにより、多くの方々に対して普及を図れたと考える。</p> <p>◇基本編に関しては、作業は計画通り進んでいる。</p>	
⑦ 成果の有効性	<p>◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。</p> <p>◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇当初ホームページ掲載の教材の4月から12月までの閲覧数が、合計2,800以上となっており、講座受講者を含め多くの方々に利用されていると思われる。</p>	
⑧ 今後の改善方策	<p>上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等</p> <p>初歩編作成の経験を活かし、平成30年度から3年計画で実施している基本編レベルの教材開発を着実に進める。</p>	

自己評価書（研究活動用）

講座群 コミュニケーション支援ボランティア養成講座

評価者 山崎 ゆき子

実績概要

研究テーマ	コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	
①目的	コミュニケーション支援ボランティア養成のための語学教材の研究開発を行う。	
②目標	<p>成果物：コミュニケーション支援ボランティア養成のための自習用英語WEB教材</p> <p>成果物の普及：本所ホームページにて公開し、県民の英語によるコミュニケーション支援活動に資する。</p>	
③実施内容	<p>実施期間：2018～2020年度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度は、2018年度に作成した英語初歩編レベル向け音声付き自習用WEB教材改訂版を、使用者の反応を参考に、より使いやすい内容に改良した再改訂版を作成する。 ・上記作業と並行し、初歩編レベル向け教材作成でのノウハウと経験を生かし、基本編レベル向け自習用WEB教材の研究開発を行う。 <p><研究実施体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・作成の主たる研究構成員として、英語担当教員である寺澤君江が中心となり英語の教材開発研究を行い、山崎ゆき子（フランス語）が作成を統括する。さらに、異文化理解なども含め、英語以外の外国語によるコミュニケーション支援ボランティア養成との比較検討や調整の有用性と必要性から、中島ベルナルド（スペイン語）、新谷雅樹（中国語）も作成検討会議等に参加し、異文化理解支援事業担当教員全員で教材全体の作成を行う。英語部分校閲及び音声録音については、英語ネイティブ教員の協力を得る。また、必要な場合には、適宜外部研究機関、研究者と連携を図る。 <p><計画></p> <p>2018年度：初歩編に音声を組み込んだ改訂版の作成 基本編の構成内容の検討と素案の作成</p> <p>2019年度：初歩編の再改訂版の作成、基本編の原案作成</p> <p>2020年度：基本編の完成版作成</p>	
④実施方法	成果発表	学会等発表・論文発表（アカデミア紀要・その他）・出版・ HP掲載
	外部資金	申請・ 不要
	他機関との連携等	なし

成果物等

⑤ 成果等	成果物及びその普及	<p>2018年度：・初歩編に音声を組み込んだ改訂版完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当所ホームページに2018年10月から掲載 ・研究紀要への投稿 <p>題目「外国語を使ってボランティアを目指すための語学講座英語（初歩編）～自習用WEB教材の作成～」</p> <p>『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第8号、平成31年3月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本編の素案および第1課の試案作成 <p>2019年度：・2018年度に作成した音声付き初歩編の再改訂版完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本編の原案作成
	講座への反映	英語講座（初歩編、基本編）受講者に対し、講座での学習内容の定着を目的とした復習教材としての利用を提案。

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥目標達成度	<p>◇当初計画で立てた目標を達成できたか。</p> <p>◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。</p>	<p>A. 達成</p> <p>B. おおむね達成</p> <p><u>C. やや不十分</u></p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇初歩編に関しては、内容を一部変更することにより、受講者が一層利用しやすいようにした。</p> <p>◇ホームページ公開により、多くの方々に対して普及を図れたと考える。</p> <p>◇基本編に関しては、作業に遅れが生じている。</p>	
⑦成果の有効性	<p>◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。</p> <p>◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。</p>	<p><u>A. 達成</u></p> <p>B. おおむね達成</p> <p>C. やや不十分</p> <p>D. 未達成</p>
	<p>【評価結果の理由】</p> <p>◇当初ホームページ掲載の教材の2019年4月から2020年3月までの閲覧数が、合計3,596件となっており、講座受講者を含め多くの方々にご利用されていると思われる。</p>	
⑧今後の改善方策	<p>上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等</p> <p>初歩編作成の経験を活かし、2018年度から3年計画で実施している基本編レベルの教材開発を進め完成させる。</p>	

自己評価書（研究活動用）

講座群 コミュニケーション支援ボランティア養成講座

評価者 山崎 ゆき子

実績概要

研究テーマ	コミュニケーション支援ボランティア養成のための教材の研究開発	
①目的	コミュニケーション支援ボランティア養成のための語学教材の研究開発を行う。	
②目標	<p>成果物：コミュニケーション支援ボランティア養成のための自習用英語WEB教材</p> <p>成果物の普及：本所ホームページにて公開し、県民の英語によるコミュニケーション支援活動に資する。</p>	
③実施内容	<p>実施期間：2018～2020年度</p> <p>・2020年度は、2019年度に作成した英語初歩編レベル向け音声付き自習用WEB教材の再改定版に続き、そのノウハウと経験を生かし、基本編レベル向け自習用WEB教材の研究開発を行い完成させる計画であった。</p> <p>・しかし、作成の主たる研究構成員である英語担当教員および異文化理解や英語以外の外国語との比較検討の観点から参加していたスペイン語担当教員が退職したことに加え、新型コロナへの対応を優先させたことから、基本編の作成を中止した。</p> <p><当初計画の研究実施体制></p> <p>・作成の主たる研究構成員として、英語担当教員である寺澤君江が中心となり英語の教材開発研究を行い、山崎ゆき子（フランス語）が作成を統括する。さらに、異文化理解なども含め、英語以外の外国語によるコミュニケーション支援ボランティア養成との比較検討や調整の有用性と必要性から、中島ベルナルド（スペイン語）、新谷雅樹（中国語）も作成検討会議等に参加し、異文化理解支援事業担当教員全員で教材全体の作成を行う。英語部分校閲及び音声録音については、英語ネイティブ教員の協力を得る。また、必要な場合には、適宜外部研究機関、研究者と連携を図る。</p> <p><計画></p> <p>2018年度：初歩編に音声を組み込んだ改訂版の作成 基本編の構成内容の検討と素案の作成</p> <p>2019年度：初歩編の再改訂版の作成、基本編の原案作成</p> <p>2020年度：基本編の完成版作成</p>	
④実施	成果発表	学会等発表・論文発表（アカデミア紀要・その他）・出版・ <input type="checkbox"/> HP掲載
	外部資金	申請（平成〇年度分）・ <input type="checkbox"/> 不要

他機関との連携等	なし
----------	----

成果物等

⑤ 成果等	成果物及びその普及	<p>2018年度：・初歩編に音声を組み込んだ改訂版完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当所ホームページに2018年10月から掲載 ・研究紀要への投稿 題目「外国語を使ってボランティアを目指すための語学講座英語（初歩編）～自習用WEB教材の作成～」 『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第8号、平成31年3月 ・基本編の素案および第1課の試案作成 <p>2019年度：・2018年度に作成した音声付き初歩編の再改訂版完成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本編の原案作成 <p>2020年度：・基本編完成版の作成を中止</p>
	講座への反映	なし。

自己評価

評価項目	評価の視点	評価結果
⑥ 目標達成度	◇当初計画で立てた目標を達成できたか。 ◇研究成果は、十分な実績を得られたか。報告書作成、ホームページ掲載などにより、普及を図れたか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 <input checked="" type="checkbox"/> D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇基本編を完成させることができなかった。	
⑦ 成果の有効性	◇研究成果は活用されているか。研究成果を実際に活用した者から満足な評価を得られているか。 ◇アカデミアが実施する研修講座に反映されているか。	A. 達成 B. おおむね達成 C. やや不十分 <input checked="" type="checkbox"/> D. 未達成
	【評価結果の理由】 ◇当所ホームページ掲載の初歩編の閲覧数は2020年4月から2020年12月までで合計2,017件、2019年4月からの合計は5,703件となっており、講座受講者を含め多くの方々に利用されていると思われるが、基本編は作成を中止し公開していない。	
⑧ 今後の改善方策	上記の評価結果を踏まえ、今後改善すべき点等 当所ホームページに現在掲載している初歩編再改定版を、アカデミア閉所後も継続して公開するとともに県民への周知を図り、今後も利用してもらえるようにする。	

(空白)